

◇平成29年／2017年1月号 第86号◇



フジサンケイグループ

会 産経国際書会 報

SANKEI INTERNATIONAL SHO ASSOCIATION



風岡五城理事長 揮毫

「酉」— 十二支の十番目。太陽が昇るとき必ず鶏が鳴くため、太陽の神を呼び出す力があるとされています。「古事記」でも、天照^{あまてらすおのみかみ}大御神が天岩戸に隠れ世界が闇に包まれたとき、アメノウズメの踊りとともに、常世長^{とこよのながさとり}鳴鳥(鶏)に鳴かせて呼び出したと、描かれています。



産経新聞社
事業本部長
伊藤 富博

飛翔のきっかけの年に

明けましておめでとうございます。
会員の皆様、本年もよろしく願っています。

私が6月に着任してから、すでに半年が経ちました。

その間、本展、ジュニア書道コンクール、東北展、瀬戸内展、関西展、中部展、東西で行いました研修会、理事会、顧問会議が終了し、また各社中展にもそれぞれお伺いさせていただきました。

そういった中で、現在の書道界を取り巻く状況につきまして、先生方、関係者の皆様からさまざまな貴重なご意見、ご指摘を頂戴いたしました。創設時の熱気が乏しい、会員が減少していることについて、35周年記念事業はどうするのか、など…。産経国際書会のことを真剣に思っているからこそそのご意見だと思います。その上で、会友賞の増設、U23とジュニア書道コンクールの連携と出品者の本展への取り込みなどは、今回から実施することになりました。

少子高齢化に伴う書道人口の減少は避けては通れません。そういった中でも、知恵を絞り、工夫を凝らせば、まだまだ発展させることが出来ると思います。今年は酉年、第34回展を迎えます。来るべき第35回展に向けて、飛翔のきっかけの年にしたいと思います。

産経国際書会の発展のため、力を尽くしてまいりますので、どうか引き続きのご支援のほど、よろしくお願いいたします。



産経国際書会
理事長
風岡 五城

鶴のように鵬のように

明けましておめでとうございます。会員の皆様におかれましては輝かしい新年をお迎えることとお喜び申し上げます。

平成29年は干支でいえば丁酉^{ひのととり}の歳となります。酉は酒壺をかたどった象形で、ひいて酒の意となり、また借りて十二支の十番目に用いられるようになりました。なお「とり」は鳥全般をイメージする向きもありますが、具体的にはニワトリを指します。

前置きが長くなりましたが、鳥と言えば羽ばたくもの。産経国際書会も鶴のように優雅に舞い、また荘子の「逍遙遊」篇に登場する鵬のように、遙か彼方へ竜巻を起こして壮大に飛び立つ姿にあやかりたいものです。

産経国際書展は今年で第34回展を迎えます。来たる第35回の記念展に向けての大事な準備期間でもあります。記念事業としては現在のところ台湾との国際交流を軸に進める方向で検討しています。書を通じての国際交流は書会の重要な課題でありながら、ここ何年も実現できていません。台湾はもとより親日的な雰囲気があり、国立故宫博物院をはじめ文物の豊かな国です。この事業を推進し成功に導くことは必ずや書会の活性化に繋がるのではないかと期待しています。

何事も一人では事は成りません。会員皆様のご理解、ご協力が不可欠です。どうぞよろしくお願いいたします。

2017年を迎え一言ご挨拶

最高顧問 齋藤香坡



2017年を迎え、会員皆様にはどんな元日を迎えられましたか。本年もどうぞ宜しくお願い申し上げます。さて、昨年暮れはアメリカ大統領選で予想外のトランプ氏の当選で、世界中に興味と不安を与えた年でもありました。今年の新春展は第33回を迎えます。そこで内容がどう評価されるかで、今後の書会が問われることになります。反面、数という数字は何処の書会も同じ悩みを抱えています。熊坂社長の「両輪」という言葉のうちには、書会は企業の立場を考え理解しなければ両輪にはなりません。故に会員に無理

を強制すれば難しい結果を招くことになるでしょう。ついては現状を何とか維持する上で、レベルの向上を望む事が得策かもしれませんが、一人でも多くの出品者を募る事と、出品内容の充実以外に無いような気がします。また、会員相互の親睦を深める事は、書会の意気を上げる為にも大切な事で、お互いを敬う立場を維持することにもなります。高齢化を迎える中、気力だけは負けられない組織であって欲しいと願って止みません。

足元の一歩から

最高顧問 田中鳳柳



平成28年^{ひのえとと}丙申はあつという間の駆け足で過ぎ去り、^{ひのととり}丁酉の新春を迎えました。年齢に比例して一年が更に短くなったような感じの昨今です。体力的にも若いころ当然のように消化していた仕事ができなくなり、夜の書作が他人事のように思われることも縷々です。書道会の現況も各会書人の高齢化は否定できません。若い層の台頭を心待ちにすることも多くなりました。産経書会も例外ではありません。現在書展に陳列される作品の内容を見ても何を書くのかとい

うモチーフが見えてきません。臨書の稽古を疎かにしている結果がこんな形で出ているのかもしれませんが、足元の一歩から力強く踏み出す稽古が必要です。やる気が起きるのを待つのではなく、自らの強い意志で前進することが肝要です。幸い書会は昨年も研修会開催があり、創作意識の向上にむけ大きく前進したようです。会員同士も大きな目標に対して手を携えて前進していこうではありませんか。

“新鮮で独趣あふれる書”を求めて

最高顧問 村越龍川



新年あけましておめでとうございます。産経会報85号に朗報がありました。それは第33回展出品の復調と産経ジュニア書道展の盛況であります。これら好調の要因は、33回展と並行して開催された特別企画、ギャラリートーク、講演会、揮毫会、最高顧問講師陣による夏期講習会等々の成果によるもの大と考えます。今後も産経書会の立案で、平成のいまを視野にした「現代を生きる書」をアピールするイベントプランを積極的に展開されんことを期待します。

さて、私も書を友としてはや半世紀を越えま

した。酉歳を迎えた本年も、古文を素材にした少字数書を追及して参ります。そして、21世紀のいまを生きる人々に「書の世界の広大さと楽しさ」を共感いただけるような“新鮮で独趣あふれる書”を求めての模索行脚を続けて参ります。

唐の詩人・岑参は「鶏は紫陌に鳴いて曙光寒し、鶯は皇州に囀じて春色たけなわ」と鶏鳴一声、新春到来を謳っております。

本年も産経書会に集う皆さまに、いや増す吉事万来を希ってやみません。

東北展

東北展実行委員長
松崎龍翠

会期●9月9日(金)～14日(水) 会場●せんだいメディアテーク



伊達政宗賞の黄木孝一さん(右)と第18代伊達御当主・伊達泰宗様

去る9月9日より14日の6日間に亘り、仙台メディアテークに於いて、東北展が開催されました。期間中、好天に恵まれ、多くの方々に書道に対する理解と啓発を一層深めることができ、書展の意義をより高めるものとなりました。

作品鑑賞会では、前実行委員長の田村政晴先生を中心に進行し、東北出品者の最高賞と

もいふべき伊達政宗賞の黄木孝一氏や準大賞の日野翔鳳氏、無鑑査会員特別奨励賞の愛澤奏剣氏、建部紘子氏などが、書作の思いや苦勞話などを披露され、参加者の感動と拍手が渦巻いておりました。また、内閣総理大臣賞の原田圭泉先生のお話にも盛大な温かい拍手が贈られました。

贈賞式では、仙台伊達十八代御当主伊達泰宗様をはじめ、伊藤富博事業本部長、渡邊麗理事長代行等に御来臨を賜り盛会裡に開催されました。その後の講演会では、原田圭泉常任顧問による「『現代書雑感』圭泉のひとりごと」と題して、親しめる有意義な貴重な時を過ごせたことを感謝しております。

本展にあたり、彙雅人事務局長をはじめ東北展実行委員会諸氏に深甚なる謝意を表したいと思ひます。



講演をする原田圭泉先生



作品解説をする松崎龍翠実行委員長



会場風景

第33回 産経国際書展瀬戸内展 贈賞式 祝賀会



実行委員会の先生方

瀬戸内展

瀬戸内展実行委員長
世木田 江山

会期●9月27日(火)～10月2日(日) 会場●広島県立美術館



80歳以上会員の色紙作品とジュニア作品

第33回産経国際書展瀬戸内展は、例年通り広島県立美術館で、9月27日から10月2日まで、開催されました。今年は広島県東部から初の展示参加があり、またU23の部の躍進もあって一層の充実を見ました。そして今回は、受賞者にギャラリートークをお願いしました。特別賞の方が各部門を網羅しており、話題が広く興味深く聞けました。鑑賞者の増加にもつながったようです。

贈賞式には、福本雅保会長代行、風岡五城理事長のご挨拶をいただきました。その後受賞者の方々は栄えある賞を受けられ、さらなる意欲を燃やされたものと思われます。祝賀会

では、広島県議会議員・奥原信也様、広島県書美術振興会理事長・村上俄山先生のご祝辞をいただき、勝田晃拓副理事長の乾杯で祝宴になりました。参加会員は、慌ただしい中にも諸先生方との交流や、互いの和やかな歓談の内に次年度への決意を固めて行きました。最後に実行委員の紹介、大庭清峰実行副委員長の閉会の辞で無事終了いたしました。

ご多用の中、遠方よりご出席いただきました書会幹部の先生方、ご来賓各位、さらには広報にご尽力下さいました産経新聞広島総局の方々に厚く御礼申し上げます。



入り口を飾るふたつの会長賞作品(左=鈴木蒼氏、右=山本てるみ氏)



賑わう会場

関西展

関西展実行委員長
正川子葉

会期●11月22日(火)～27日(日) 会場●大阪市立美術館



U23の表彰

昨年に引き続き、産経新聞大阪本社のお膝元である大阪市立美術館で第33回産経国際書展が開催され、寒さ増す中、総数2,146人のご来場があり、嬉しい限りです。これも関西展恒例のジュニア展最優秀作品や高校生の軸作品等を展示することで来館者数の増加に繋がっているものと思います。

最終日に天王寺都ホテルで贈賞式・祝賀会が盛大に執り行われ、産経新聞社大阪代表の

齋藤勉様より9月に関西で初めて行われた研修会の成果が述べられ、今後の活動に協力賜るとの力強い励ましのお言葉を戴きました。理事長の風岡五城先生からは「賞はいただくものではなく、自分から取りに行くもの」と厳しい中にも、勇気づけられる言葉に身が引き締まる思いでした。また、関西展の代表挨拶として今口鷺外常任顧問より、これからの書展のあり方・考え方など、色んな方向からのお話があり今後の指針が見えたような気がします。

そして、今回初めての試みとして関西のU23受賞・入選者を一人ずつ壇上にて表彰、贈賞式に新しい息吹を感じました。先人のルールに乗るだけでなく創意工夫を大切に、夢と希望に溢れる作品作りに挑戦してもらいたいものです。我々も若者に遅れを取ることなく、なお一層の精進を決意し第33回展を無事終了致しました。



幹部作品



産経新聞社・齋藤勉大阪代表、恒例のバンザイ！



会場風景



中部展実行委員会の先生方

中部展

中部展実行委員長
村田白葉

会期●11月29日(火)～12月4日(日) 会場●愛知県美術館ギャラリー



会長賞を受ける加藤松亭さん(右)

地方展の最後を飾る第33回産経国際書展中部展は、昨年に引き続き、愛知県美術館において開催されました。展示会場が前年より少し狭くなり、展示作業が大変でしたが、連日、大勢の入場者で賑わい、盛況のうちに幕を閉じることができました。

3日(土)の贈賞式・祝賀会には大村秀章愛知県知事のご出席を頂き、産経国際書展に対する暖かいお言葉を賜り、出席者一同、胸を熱くいたしました。また、ご来賓の方々、書会役員の方には、ご多忙の中、遠路ご出席をいただき、盛大に開催できました事、心から厚く御礼申し上げます。

祝賀会終了後、展覧会場に移り、風岡五城理事長、村越龍川最高顧問によるギャラリートークを実施いたしました。内閣総理大臣賞受賞の原田圭泉先生から作品意図をお話し頂き、続いて会長賞、国際大賞受賞者に作品への思いなどを語っていただき、解説を風岡五城先生、村越龍川先生にして頂きました。

参加者の皆様には有意義な時間を過ごすことが出来たのではないかと思います。

実行委員の先生方、関係各位には、献身的なご協力をいただき、無事終了できましたことをここに厚く御礼申し上げます。



会場風景



作品解説で賑わう会場

高円宮賞

21世紀国際書展グランプリ賞

多田游硯

小野左鷲



高円宮賞の多田游硯先生(左)と21世紀国際書展
グランプリ賞の小野左鷲先生(右)

11月27日(日)午後5時より新橋第一ホテルに於いて受賞記念パーティーが催されました。産経国際書会最高顧問・齋藤香坡先生、産経国際書会会長代行・福本雅保様、産経新聞社横浜総局長・新井好典様はじめ多くの方々によりご祝辞を頂き、そのあとご来賓の紹介をいたしましてから静かな音楽の流れる中、歓談に入りました。この度、2名同時に受賞させて頂きましたことは斯華会の名誉であり会員全員のよろこびでもありました。これで安心することなく、学ぶ心を忘れずに精進して参りたいと思っています。最後に花束贈呈、受賞の言葉に続いて、斯華会歌「無断花の歌」を皆で斉唱し、山下海堂先生の元気いっばいの三本締めで和気藹々のうちに終わることが出来ました。おいで下さった方々に厚く御礼申し上げます。(多田游硯)

最後、花束贈呈、受賞の言葉に続いて、斯華会歌「無断花の歌」を皆で斉唱し、山下海堂先生の元気いっばいの三本締めで和気藹々のうちに終わることが出来ました。おいで下さった方々に厚く御礼申し上げます。(多田游硯)

内閣総理大臣賞

原田圭泉



左から原田圭泉先生、手島泰六先生、佐々木月花先生

7月11日(月)、三笠会館にて母、佐々木月花の「紺綬褒章」を祝う会をささやかに(4月に八戸市で祝う会を開催していただきましたので)開催させて頂く事になり、その準備をしております時「内閣総理大臣賞」のお知らせを頂きました。親子共々の慶事はめったにない事ですので急遽、内祝いとして便乗させて頂く事に致しました。改めて私のご案内は差し上げませんでしたので、当日、皆様は驚かれた事と思います。失礼致しました。

120人の方々においでいただきました。産経新聞社熊坂隆光社長、清原武彦相談役、書会から田中鳳柳先生、そして、小淵優子先生方にお祝詞をいただき、齋藤香坡先生に乾杯の音頭をお願いしました。月花の好きな津軽三味線も賑やかに楽しんでいただき、また、皆様方に盛り上げて頂き有難い事でした。そして手島泰六先生、山下海堂先生には楽しく、楽しく会を締めさせていただきました。お礼申し上げます。急な私の割り込みで不手際など多々ございましたでしょうがお許しください。それでも97歳の月花に少しは親孝行できたのではないかと考えております。ありがとうございました。(原田圭泉)

理事会で来期の概要決まる

平成28年度産経国際書会理事会が12月5日(月)、東京千代田区の大手町サンケイプラザで開かれました。はじめに産経新聞社の伊藤富博事業本部長から挨拶があり、その後、風岡五城理事長が議長を務め、議事を進行いたしました。途中、別の会議の合間をぬって熊坂隆光産経新聞社社長が来場、挨拶と今年の先生方の頑張りに対して御礼を述べさせていただきました。

事務局から11月までの事業報告、今後のスケジュールの説明がありました。次に人事案の説明。執行部役員については、来期が2年任期の2年目に当たると言うことで、変更はなく、専管理事以下の役員についても少数の変更にとどめました。また審査会員、無鑑査会員、会友については、216人の昇格人事を発表し、承認されました。また、来年度の実行委員会や運営委員会につい



ては原則昨年度のメンバーが引き続き担当することです承されました。

その他、日本書道ユネスコ登録に関する進捗状況の報告、第34回本展の募集要項について、会友特別賞を新設するなどの改善点を説明し、理解を得ました(敬称略)。 (事務局)

平成28年度顧問会議

毎年秋に1回、開催されている顧問会議が10月25日(火)に産経新聞社8階会議室で開かれました。参加された先生方は、田中鳳柳最高顧問、石川天瓦、竹澤玉鈴、手島泰六、山下海堂名誉顧問、佐藤青苑常任顧問、五十嵐光子、宮崎春華顧問と今年からご参加の青陽如雲常任顧問、白崎菖汀、森井翠鳳顧問に伊藤欣石名誉理事長と風岡五城理事長でした。事務局からは伊藤富博事業本部長、福本雅保会長代行、糸雅人事務局長が参加して行われました。

会員のモチベーションの向上に向け、会友から無鑑査へ昇格する基準の見直しや会友での賞の新設や増大などが話題にでました。また、臨書の大切さにも触れられ、展覧会での臨書作品のコーナーを設けたり、クローズアップすることができないかなどの意見もでました。新春展の大作については昨年の顧問会議でも様々な意見が出ましたが、今年も活発な意見交換が行われました。

(事務局)

第34回 産経国際書展 募集要項

変更点

前回と変わるところは以下の通りです。

1. 会友対象の賞を会友特別賞、会友賞、会友奨励賞の3種類とします。
2. 作品寸法に全紙・小画箋(135cm×70cm)の区分を設けます(D)。
3. U23は、16歳以上ではなく高校1年生以上23歳までとします。出品料は1点5,000円とするが、「2017ジュニア書道コンクール」高校生A部門出品者(出品料3,900円)はU23部門の出品料(1点)を無料とします。高校生の方もU23に奮ってご応募ください。

会友特別賞が新設!

【出品資格】 18歳以上の方ならどなたでも、但しU23は高校生以上23歳まで(平成29年4月1日現在)

【作品部門】 (各部門とも未発表作品に限ります)

- 漢字部門：A 20字以内 B 21～200字以内 C 201字以上
- かな部門
- 現代書部門：A 少字数書(4字以内) B 近代詩文書(漢字かな混じり文) C 墨象 D 刻書
- 臨書部門：A 漢字 B かな ※出典は自由
- 篆刻・刻字部門：A 篆刻 B 刻字 ※この部門は第1分野です
- U23部門：年齢制限(高校生～23歳)のみ、すべてのジャンルの書作品を同じ土俵で審査します。

【作品寸法】 (仕上がり寸法を基準とする)

第1分野

紙の最大寸法	額(外枠)の寸法=基準寸法
A 238cm×57cm	8尺×2尺(242cm×61cm) 縦のみ
B 177cm×57cm	6尺×2尺(182cm×61cm) 縦横自由
C 132cm×102cm	4.5尺×3.5尺(136cm×106cm) 縦横自由
D 135cm×70cm	5.8尺×2.8尺(176cm×85cm) 縦横自由
E 177cm×87cm	6尺×3尺(182cm×91cm) 縦横自由
F 118cm×118cm	4尺×4尺(121cm×121cm)

※紙寸法聯落以上の作品であること(但し一つの詩・詞で半切2枚の貼り込みは可)。

※篆刻・刻字・刻書は規定以内であれば自由。

※「かな」の小作品でも、上記規定寸法A、B、C、D、Eに貼り込めば第1分野と認めます。

第2分野

紙の最大寸法	額(外枠)の寸法
G 135cm×35cm	小画箋2分の1・縦横自由
H 88cm×88cm	小画箋2分の1・方形のみ

※半切は種類により寸法に多少違いがありますが、1～2cmの誤差は認めます。

※「かな」の小作品は、上記規定寸法G、H以外でも第2分野として認めますが極端に小さい作品は不可。

【出品料】 第1分野・第2分野とも(税込み)

①1点=13,000円、②U23(高校生以上23歳まで)1点=5,000円、但し「2017ジュニア書道コンクール」高校生A部門出品者はU23部門の出品料(1点)を無料とする。③日本国籍以外の方1点=8,000円、④複数出品の場合(2点目以降)1点=5,000円

【賞】 高円宮賞、産経大賞など特別賞と特選、秀作、入選など。

【応募締切】 平成29年5月8日(月) 午後3時までに指定表具店(別記)に搬入をお願いします。

【発表】 平成29年7月中旬 産経新聞紙上にて。

【贈賞式】 平成29年8月1日(火)、明治記念館(東京都港区元赤坂)

【展覧会】 会場：東京都美術館 東京都台東区上野公園8-36

会期：平成29年7月27日(木)～8月3日(木)

開館時間：午前9時半～午後5時半 入場は5時まで

入場料：500円(心身に障害のある人と付き添いの方1人、65歳以上、および学生は無料)

展示作品：秀作以上の入賞作品、地方展(東北、瀬戸内、中部、関西)展示エリア以外の入賞作品

ジュニアA出品の高校生はU23の出品料1点無料

問い合わせ 詳細な募集要項と出品票は産経国際書会までご請求下さい。

第34回 産経国際書展 審査員

●特別選考委員会

石川天瓦、伊藤欣石、角井博、齋藤香坡、佐藤青苑、晋嶋、竹澤玉鈴、田中鳳柳、手島泰六、原田圭泉、村越龍川、山上海堂、吉野毅、若林覚

●審査員

漢字／岩下鳳堂、大庭清峰、恩田瑞貞、勝田晃拓、北野春香、小関麗翠、坂本香心、佐藤志雲、眞田朱燕、高木撫松、長尾佳風、宮崎春華、山本晴城、和田玲砂

かな／伊藤春魁、今口驚外、小名雪揺、鎌田悠紀子、武富明子
現代書／岩浅写心、加柴律子、川村圭子、小久保里子、小杉秀久、小林千津、莊司欣水、田村美雪、富田静流、藤井峯子、堀江宣久、正川子葉、山田秀園

篆刻・刻字／石井長慶、風岡五城、森井翠鳳

臨書／岩田正直、金丸鬼山、五月女紫映、青陽如雲、渡邊麗

U23／加藤芳珠、高頭子翠、高橋照弘、人見恵風、松崎龍翠

2017産経ジュニア書道コンクール

開催要項
会 期 平成29年7月27日(木)～8月3日(木)
 午前9時30分～午後5時半(最終日は午後3時まで)
 前期＝7月27日(木)～30日(日)、後期＝8月1日(火)～3日(木)
 ※7月31日(月)は展示替えのため休室

会 場 東京都美術館 2階第4展示室
賞 文部科学大臣賞など特別賞。今年から特別賞の次点として「推薦」という枠を設けました。特別賞、推薦、特選、秀作、佳作となります(中学生以下)。

贈 賞 式 平成29年7月29日(土)午前11時(予定)

審 査 員 平成29年4月中旬に発表します。審査委員長は高橋照弘、実行委員長は眞田朱燕。

発 表 入賞者氏名は平成29年7月中旬の産経新聞紙上(予定)で発表します。

募集期間 平成29年4月3日～6月2日消印有効

搬入場所 〒234-0054 神奈川県横浜市港南区港南台7-51-12 藤和額装内「産経ジュニア書道コンクール」係 ☎045-833-5273

出品要項
応募点数 一人何点でも可
応募資格 幼年、小学生、中学生、高校生

推薦が新設
 されました

出品規定

書 体		幼 年	小学生	中学生	高校生
		楷書		楷書または行書	自由
大きさ	A部門	八つ切り			半切たて
	B部門	半紙			半紙または半切よこ4分の1 縦横自由
作品への名前等の書き方		年齢と姓名 姓名どちらかでも可	学年と姓名 小1、2年は姓名どちらかでも可	名前(姓不要)の下に書または臨と墨書	
出品票		漢字でフルネームを記入し必ずふりがなを明記し、作品の左下隅に貼付			臨書は法帖名、創作は題名を備考欄に記入

※八つ切り＝半切4分の1(たて68cm×よこ18cm)、半切＝たて135cm×よこ35cm、半切よこ4分の1＝34cm×35cm
 ※規定の出品一覧表を添えてください。

	規定の漢字数	参考課題	
幼年	規定なし	とり	せいざ
小1	規定なし	みらい	たいよう
小2	規定なし	山びこ	ほしぞら
小3	漢字1字以上	ふん水	月あかり
小4	漢字2字以上	流れる川	一番乗り
小5	漢字3字以上	青い地球	水車小屋
小6	漢字3字以上	夏の星座	学校生活
中学	漢字4字以上	銀河流星	佳気満高堂
高校	制限なし(一字書から多字数)	臨書あるいは創作(書体自由)	
国際	規定なし		

※国際は外国人または国外在住の日本人
 ※参考課題は、A(八つ切り)部門、B(半紙)部門共通です。

出品料

	中学生以下	高校生	国際
A部門	1,000円	3,900円	600円
B部門	600円	600円	600円

※金額は税込み、高校生A(半切)部門は軸装料含む。
 また、軸装作品は展覧会終了後、返却します。
 出品料は下記銀行口座にお振込みください。
 みずほ銀行 大手町営業部 普通2786314
 口座名:ジュニア書道コンクール

募集要項、出品票、一覧表は産経国際事務局☎03(3275)8902までお問合せください。一式資料をお送りいたします。

齋藤香坡、田中鳳柳、村越龍川の最高顧問3人の先生が揃って、それぞれの書論を語られた東京での夏期研修会(8月20、21日、大手町サンケイプラザ)。書会には、実施から3カ月を過ぎても、「あのごときの講演は素晴らしかった」「もう一度聞きたい」などの反響が寄せられています。ご要望に応じて当日のご講演の要旨を再録いたしました。あわせて全文も産経国際書会のホームページ<http://sankei-shokai.jp/>で公開しています。どうぞ、書の神髄に迫るお話を今一度読み返して、今後の研鑽に役立ててください。

講義録詳細はこちらをクリック

8月20日 村越龍川先生 「臨書の取り組み方いろいろ」

私はきれいでうまい字よりも、無骨でも剛気あふれる字を書きたい。そんな思いがこのところ強く胸にあります。書一筋の道を歩み、60年を経過いたしました。平成の今を生きる、おのれの生命の鼓動を筆面にいかに盛れるか、それが勘所と考えて筆を執っております。

書の表現力をつけるには古典(古法帖)の臨書で学ぶのが第一です。古典の臨書、つまり古典とはなんだろうか、ということですが、書の古典とされる名跡は、大変に長い歴史を有しています。楷書や草書が生まれてから、すでに千数百年を経過して、残された名跡の数も、無限に近いように感じております。

さて、これからは、私が書を学んだ道筋をお話いたします。20歳を少し過ぎた頃、地元浜松の先生に入門いたしました。その頃の私は、生まれつき手筋が悪いのか、人様にとっても見せられない悪筆でした。先生はとてつもなく寛容なお方で、こんな私をとてつもなく可愛がってくださり、手とり足とりのご指導、書技の基本、書の歴史、文房四宝に至るまで、さまざまな事を教えて下さいました。このおかげで、私は書の奥深さ、書の世界の幅の広さを知ることができました。

その後、私は中央展出品を志し、神戸の広津雲仙先生に師事いたすことになりました。当時の関西は「明清時代の書」が隆盛で、私も、王鐸、傅山、趙之謙、張瑞図などを習い、その書風の修得に努めました。特に私は張瑞図に魅せられ、日展に瑞図風の作品を出品しておりました。呉昌碩にもはまり、呉昌碩のあの強烈な筆線を自分の書に得たいと臨書に明け暮れました。

次に、私は仮名の勉強にも手を染めました。今も時おり、「村越さんは漢字作家なのになぜ仮

名が書けるのか」と聞かれることがあります。

仮名のルーツを探ると、漢字の草書です。私は「書譜」で草書をみっちり習いました。この「書譜」の臨書が、私の仮名の用筆に生かされ、プラスを生んでいるのかもしれない。仮名の話で思い出すのは、かつて青山杉雨先生が「仮名作家の作品は線が弱すぎる」と言われて、仮名専門の先生方に漢字学習の必要性を説かれたと聞いております。

私の仮名のテキストは専ら空海の「風信帖」です。風信帖は、中国書にない、日本人特有の情緒性と、その書貌と筆触に感ずるからです。もちろん、関戸や寸松庵などの古筆も座右に置いて、手習い、目習いを続けております。

それからもう一つ、私は欲ばりで、若い頃は、ペン字の勉強にも力を入れました。ペン書道誌の「ペンの光」や「近代ペン」などを購読し、毎月の競書出品にも精いっぱいがんばりました。ペン字も楷、行、草が基本で、特に書翰文等の連綿が、後年始めた私の「かな書」の稽古にも随分と役立ったように思います。いま振り返って考えますと、仮名やペン字にも、熱中し書法研鑽の領域を広めておりましたのが、書道カル



スライドで説明する村越龍川先生

チャー教室の講師を勤める今も、大いに役立っていると思います。そういえば、日本画の巨匠平山郁夫画伯がその著書で、「何事も広く掘らないと高い境地は望めない」と力説されています。

私たちの古典の学習もできるだけ多種多様の法帖を幅広く学んで、作品に、広さ、深さ、高さを求めるのが大事と考えます。

8月20日 齋藤香坡先生 「私の初(書)体験」

今日は私が書に入ったきっかけ、感じたことを入れながら話したいと思います。

私は書をやる前に、お花をやっていました。学校に書道部があったので高校2年の終わりに入って、一度でいいから朝礼で校長先生から賞状をもらいたいと思い、高3になって特選に入り賞状をもらい、そして東京都美術館での学生展では文部大臣賞に入ったのです。それが書の道に本格的に入るきっかけになりました。上手いから入ったのではなくて、運が強いから入った。易者さんに見てもらったら、あなたは書の道へ行けと。性格も書の道に行くのが良いと。それで、お花をやめて書の道に行くことにしました。

ところが、書の道に来て感じたことは、お花の世界で学んだことと本当に似ている世界なのです。お花を習っている方は分かるかもしれません。

さきほど村越先生が書かれている姿を見て、非常に筆先に力が籠っていることがわかりました。作品制作については、必ず書いている人の構え方、筆のどの程度のところを持っているか、どの辺の筆管の高さで書いているのか、全ての動作を見極めないといけません。それらをすべて見て学ばないと、自分のコントロールが出来てきません。それが線の厳しさの世界です。自分の線を作るまでの間は、色々なことを学ばないと良い作品は出来ません。書家だから良い字が書けるのではなくて、政治家でも、踊りや歌の世界にしても、苦勞に苦勞を重ねた人の作品には、その経験がやがて線やそれぞれの道に表れてくるのです。

次の機会があったら、揮毫される先生方がどのような筆を使って、どのような技法で、どのような作品になるのかということをしっかり見極めてほしい。能動的な強いディテールは書きや

さて余談が長くなりました。書の「学習の基本」は、繰り返しになりますが、やはり「古典の臨書」につきると思います。書技の基盤は、古法帖の字姿をそっくり真似る形臨に徹すること。次は、その風趣を求め意臨に至り、更に、倣ねる臨書(形臨)を脱し、創くる臨書(背臨)を模索して、誰のマネでもない、自分だけの字貌、つまり自分自身の書風の創造にあると思います。

すいけれども、(書の)深みを考えると、筆の走りがやや速くなりますから、そこに「命」を置きながら書く、ということが薄れがちになってくるのです。1本の線を引くにしても、時間をかけて引いていく線は、そこにどれだけ余分な時間を使って「墨」を置いていくことができるかです。それが分かってくると、点一つ打つにしても、「打ちました」と、ただ「点を打った」のとでは違うことがわかります。それが作品なのです。

後世に残る作品はそういうものかと思えます。それが無いものはやがて消え去るものかと思っています。

失敗と成功とは、いつも裏と表に表れます。例えば一つの筆を使うとき、初心者、2、3文字書くと墨がなくなりますが、慣れてくると10文字ぐらいは書けるようになります。裏に残っている部分の墨を使えるようになるからです。自動車の運転では曲がり角は車輪が回転しますが、筆使いも上手になれば、あえて曲げなくても曲がれるようになる。それは心(身体)が知るからです。心を知るということは、見えない世界ですから、その世界を(筆に)託していくというのが作品の作り方なのです。

一つのものを学ぶには、その中に飛び込んでいかなければ、なかなか得ることはできません



熱く語る齋藤香坡先生

ん。私は、絵を描くときは写生をせず見ないで描きますが、夜中に始めるため、何も見えないから頭の中で描いていくのです。そうすると、昼間に描きたいと思うものに出くわしますと、それに目を注ぐようになります。臨書の世界と同じです。

書を学ぶことは、まずどん底に落ちることがいいと思います。おカネの苦勞もいいでしょう。われわれが書を始めたころは、半切1反が2万7千円ぐらいで買っていたときがあります。アルバイトで稼いだお金を皆つぎ込んで。今思うと、そのとき貯金していれば御殿に住めました(笑)。けれどもそういう経験は、人間としての

生きがいかと思います。

臨書は型を学ぶことです。ただ、古典、古典とこだわるのも10年、20年ぐらいたらよろしいが、30年を過ぎたら、自分の作品を作らなければなりません。失敗してもいいのです。まず作ることです。そして臨書を学ぶなら、自分が見て良いと思うものを中心にやられたほうがいい。産経展で臨書が出ますが、それぞれの臨書はどんなに素晴らしくても、審査員は臨書としてよりも作品として見ています。それを考えると、やはり自分をどこに置いて、どういう考えでどの方向に向かうかを、自分で作り上げていただけたら、と思います。

8月21日 田中鳳柳先生 「古典〜いつやるの？今で書論」

7月下旬に第33回の産経国際書展が終わりました。作品内容の向上に向け努力した結果が見えたでしょうか。個性的な作品がなく、師の顔が浮かぶような内容の作品ばかりでは展覧会を開催する意味はありません。この傾向は師の手本による作品作りが主だと言われる日本の書壇の仕組みに起因しているように思います。ここに、臨書の必要性や重要性が浮上してくる理由があります。

私が書を始めたのは、60年も前になりますが、当時を思い返してみると、仮に先生のお手本であっても、展覧会には他人のものまねは出品できず、臨書による個性的な作品が求められました。「俺は今年の日展は、誰々を臨書して連綿を中心とした作品を出す」とか、「古典を徹底的に研究して楷書の作品を出す」というような言葉が交わされていました。

古典を自分のものにするには時間がかかります。ここに存在するのは熱意のみです。そして少しずつ良い古典との取り組みを増やしていくことです。

臨書とは、古人の名蹟を見て学習するものです。臨書には、形臨、意臨、背臨があります。形臨は、主として点画、ディテールを客観的にまねることをいい、意臨は主として筆意や情勢を客観的にくみとることを指します。背臨は、習いこんだ古典を見ないで字形や用筆、章法などを再現することです。以上のうち、意臨と背臨は、自分の個性との戦いで、臨書作品として最も重要な部分になります。形臨から入り、臨書しているうちに意臨や背臨に入ってくる。形

臨から臨書作品への段階は重要で、慣れるまで反故を重ねることです。臨書の作品は、古典の徹底した背臨が可能になることも目的にやりましょう。

法帖は、法書を石または木に模刻し、手本や鑑賞用として剪装本にしたものを言います。単帖は『十七帖』のように内容が1種類のもの。専帖は、一人の書家の書蹟を集刻したものです。集帖は『淳化閣帖』とか『三希堂法帖』のように、複数の法帖を広く取って集め刻したものです。現在では『淳化閣帖』が最も古いとされています。

古典の臨書とは、自分の書の欠点を正し、骨格を作っていくことです。どんな古典を選択したら良いのか。私が自身のために古典の法帖を選ぶとすれば、まず唐の四大家、顔真卿、歐陽詢、虞世南、褚遂良。次に宋の三大家、蘇東坡、黄庭堅、米芾ですね。みな個性的なスタイルが確立されています。誰の作品を手本にするかは、初心者であれ、相当上位の人であれ、その人の力量に見合うというか、書の中に教えを内蔵し



田中鳳柳先生の所蔵する古典籍に見入る参加者

ていることが望ましいと思います。実は、唐の四大家や宋の三大家も、当時の古典を研究して、特色あるものを作っていたのです。

唐、宋以前の古典というと、魏の鍾繇と東晋の王羲之、王献之になると思います。明末の王鐸は、米芾の臨書をよく研究していました。『寧楽堂選集』に王鐸の臨書集が3巻あり、その中に米芾の専帖『英光堂帖』が入っています。これを見ると、王鐸がいかに米芾に傾倒していたかが分かります。このくらい似ないと、本当に勉強したとは言えないのではないのでしょうか。王鐸は羲之、献之を研究してあのような書風を生み出したとも考えられますが、米芾に近づくには、米芾が勉強したものを研究する必要があります。

ったのかもしれませんが。つまり米芾に近づくには、羲之、献之をやらなきゃならないことを悟って、それを極めたのですね。

書の美を理解するためには、古くからの優れていると言われる幾多の書に絶えず接し、美しい部分を見出し、抽出して記憶にとどめ、書に対する美の意識を高めなければなりません。理屈は分かっている、実際に自分で手に染めて法帖を臨書していく努力が必要です。今の学習だけではこれからの進展はありません。行動には意思の強力な後押しがあってこそ、初めて可能です。ぜひともそう考えて、作品に構成を与えていただきたいとお願いし、私の話を終わります。

三宅剣龍先生を偲んで

常任顧問 佐藤青苑

剣龍先生といえば、産経国際書会で米国へ行った時のことを思い出す。往路、飛行機に搭乗するや飛行中の機内を大変元気に動き回ることしきり。特にニューヨーク滞在中は、我々一行から抜け出し、単身で歩きまわられた。確か奥様もご一緒だったと記憶するが、彼女の事はほったらかし。ご主人を気遣い落ち着かぬ奥方のお守りは我々に…。一行はどれ程気を使った事だったか。でも見ていると大変心楽しい先生である。周囲には一切気遣いなく、好きに行動される師を見ていると「ほっ」とするより「にやり」としてしまう事しばしば。

反面、何気なく口にされるお言葉は、不勉強者の心をぐさっと刺激する。その昔、学校の教師をされていたというだけに深く広い知識を内蔵しておられる。

ただ単なる字書きではなく、深遠で真摯な知識の持主にならねばと思う事しきりである。

前会長代行 吉井雄二

日本の書道界に大きな足跡と優れた数多くの作品を残して、三宅剣龍名誉顧問が第33回展会期中の7月28日、99歳で亡くられました。産経国際書会設立時から数々の要職を歴任され、特に米国巡回展では事務方の中心となり、書道の普及発展に貢献されました。

昨年7月、神龍会展祝賀会での齋藤香坡先生の「百歳での展覧会は産経国際書会を挙げて支援するのでお元気で頑張ってください」の祝辞に、三宅先生はご自身の出身地、丹波篠山の「デカンショ節」を高らかに歌い上げ、応えていました。

先生の多くの作品は篠山の「三宅剣龍美術館」に、また、先生の志と思いは「三宅剣龍賞」として篠山の小中学生に受け継がれています。

感謝とともにご冥福をお祈り申し上げます。



神龍会展(平成26年6月)で膨大な書簡コレクションに見入る吉井雄二前会長代行(左)と三宅剣龍名誉顧問(右)

大阪研修会

研修部担当
勝田 晃 拓

会期 ● 9月22日 (木・祝)
会場 ● プリーゼ・プラザ



参加者の前で揮毫する風岡五城理事長

百聞は一見に如かずの通り、多見、多聞は書技向上にとって不可欠な要素、ただ書き捲るのみでは苦勞の割に効果は期待できないものだ。東京研修の素晴らしさを関西にも！の聲に、清秋連休の最終日、自身の可能性を広げるべく130余名がナニワの研修会に臨んだ。

第一部は風岡五城理事長が自ら、文化国語審議会から今年出版された「常用漢字表の字体・字形に関する指針」を元に、学校教育における漢字の取り扱い方や、表現の多様性、独自性発揮を重視する我々の今後の在り方などを明快に講義、臨書の揮毫実演では眼識力の重要性と併せて見事な筆捌きを披露頂いた。午後は岩浅写心副理事長が、落款印講義Part IIとして、押印の仕方や用具等の解説と篆刻実演、更には参加者持参作品の押印批評と盛りだくさんの内容で目から鱗のアレコレを伝授した。参加多数派が一般聴講者だったことは今後の産経展への裾野拡大や、レベルアップが十分期待でき、正に実りの秋に相応しい充実した「大阪秋の陣」となったことは嬉しい限りである。

第33回 産経国際書展 新春展

◆会期 平成29年 1月25日(水)～2月6日(月) 1月31日(火) 休館
午前10時～午後6時(最終日は午後3時)

◆会場 国立新美術館 2階B・C・D展示室

◆入場 500円(大学生以下、65歳以上は無料)。

※1月26日(木)午後2時からギャラリートーク、同日午後4時から
乃木会館で贈賞式・祝賀会を行います。

※今回は、代表展205点、新春展 I 130点、新春展 II 403点、合計738点を展示します。



新春展 II の審査は12月2日(金)、東京・六本木の国立新美術館地下1階の審査室で岩間清泉、白崎菖汀、松崎龍翠、村田白葉、渡邊麗の5人の先生方により403点の作品の審査が行われました。受賞者は以下の通り

〈会友奨励賞〉

大森翠山 木下芳珠 栗原洋子 佐藤有光 ステジヨ・ヘルベルト 三井田竹翠

〈産経新聞社賞〉

大塚美雪 奥川光華 坪井駿泉 馬場睦子 堀 珠香

〈奨励賞〉

青木美佐子	天野雅芳	池田洋珠	石原圭芳	伊藤俊明	井上すみ子	上田綾美	鶴川洋子
江上真悟	太田昭華	鎌田嘉壽	國貞螢炎	久保秀竹	栗田青樹	後藤正子	島田昌広
長野佳子	中部紫苑	中村光枝	長谷川瑞扇	服部晴翠	原 幽月	半谷松華	星 陽扇
牧野秋華	山崎深翠	山本祥月	雷 雅子	渡辺吾風	渡辺美波	渡邊洋子	

受賞者が
決まりました!

書展 トピックス

F 2016展 Vol.1

諸留大穹

会期●9月16日(金)～9月18日(日) 会場●京都万華鏡ミュージアム・姉小路館

未来の前衛書を担うべく若い7人と共に新しい船出をした。東京・大阪・広島と地方色豊かな作品20点は、各々個性が発揮されユニークな展覧。京都という地の集客もあり、初日より多方面のお客様で賑わった。今後の移動展に向け課題もあるが、若いパワーの「新たな可能性」に期待し、第2回展につなげたいと思っている。



小川瓦木回顧展—思い出のコレクション

石川天瓦

会期●9月22日(木)～10月23日(日) 会場●白井市文化センター 郷土資料館展示室



今回は十七回忌の回顧展ということで、小品を中心に、かな習字の添削を受けた習作帖や愛蔵のコレクション等珍しい作品が多く、瓦木芸術の根幹を知る貴重な展示のため、門下の一煌会では研修を兼ねて、セレモニーに参加した。当日は白井市の市長や教育部の方々、また産経国際書会の幹部役員や会員も出席され盛会であった。

展示された愛蔵コレクションでは、今では見ることもない、原拓全套本の開通襖斜道刻石、石門頌、鄭義下碑は圧巻で剪装本では感じられない迫力があり、この雄大さこそ瓦木作品の骨格を成す力強さであろう。

玉蓮・彩雲ふたり展

高野彩雲

会期●10月28日(金)～10月30日(日) 会場●八戸ポータルミュージアムはっち

臨泉会の細越玉蓮(八戸在住)・高野彩雲(東京在住・八戸出身)による「ふたり展」は、八戸・東京と離れている中、佐々木月花先生にご相談しながら開催に漕ぎ着く事が出来盛会でした。メタリック墨の大作を含め、古典と楽しく現代性を表現した作品50点を展示しました。遠方から鑑賞に来て頂いた方々にも深く感謝いたします。



第45回千墨書道展

近藤豊泉

会期●11月23日(水・祝)～11月28日(月) 会場●品川区民ギャラリー

当会は創立者、椎葉海嶽が50歳で逝去されたのち、16回展より引き継ぎ45回展を迎えることが出来ました。時代の移り変わりを反映して現在は区の依頼を受け60歳以上の人が対象となりました。日頃真摯に勉強している成果を発表する場として取り組んでおります。今回も多くのご来場者をお迎えして盛会裡に終了することが出来ました。



「書・墨・アート Vol.7 渡邊麗展」-書の姿・書のカタチ-

渡邊 麗

会期●11月9日(水)～12月4日(日)
会場●杉並区立杉並芸術会館「座・高円寺」ギャラリー

座・高円寺企画の本展は2010年より毎年開催、今年で7回目の個展。今回は高さ180cm幅12mの大作「(空海)三十帖冊子第二十九帖 橘逸勢」全臨を発表。各文字が「生命記憶」のごとく語りかけてくるように、そして会場全体の空間プロデュースを心がけた。他現代書作品7点。書やアート関係者等多くの来場者で大変盛況に終了。



石川天瓦名誉顧問が題字揮毫「辛口産経」

産経新聞新潟支局の記者が佐渡の酒蔵「尾畑酒造」で酒造りを体験して製造したオリジナル酒「辛口産経」が10月1日に発売されました。廃校となった佐渡の小学校を改造した「学校蔵」で仕込んだ日本酒度+15度の産経らしい「超辛口」です。

佐渡出身で酒豪として知られる、石川天瓦名誉顧問が揮毫。大人気で限定販売分を数日で完売しました。現在は、第2弾「号外辛口産経」を産経ネットショップ (<https://sankeishop.jp/>) で発売中。さらに辛口の+18度です。

また、新春展の贈賞式・祝賀会では、事務局の「取り置き分」を放出します！お楽しみに。



ジュニア展産経新聞社賞、村上望華さんの作品が英国で招待展示



「2016産経ジュニア書道コンクール」で、産経新聞社賞を受賞した村上望華さん(合志市立西合志東小6年)の「宇宙遊泳」が、英国・ロンドンのトラファルガー広場で9月25日に行われた「ジャパン祭り」に招待展示されました。作品は、4月の熊本地震の余震が続く中、心を落ち着かせて書きあげたもの。熊本出身のロンドン在

住の書家、佳秀さんが産経新聞に掲載された受賞記事をインターネットで知り、「地震に負けない望華さんの心と作品の力強さを英国人にみてほしい」と招待、産経新聞の記事も英訳付きで展示され、作品とともに、産経ジュニア展の名前が英国にまで届きました。

手島恭六名誉顧問の連載が本に

平成24年10月6日から28年3月5日まで産経新聞紙上に連載された、手島恭六名誉顧問の長期連載「日本の書」が同名タイトルの本(産経新聞出版、1852円+税)になりました。聖徳太子、空海から高村光太郎、川端康成といった古今の能書42作品を美しい図版とともに丁寧に紹介。「日本の書は清明の中にある」とおっしゃる手島先生持論がよくわかる内容になっています。ご希望の方はネット通販のアマゾンで。



論語の名言から学ぶ

東京学芸大学などで教鞭をとられた高畑常信客員顧問の最新刊「生き抜く智恵を『論語』の名言から学ぶ」が木耳社から出版されました(1500円+税)。論語を「人生を楽しく生きるための処世訓」ととらえ、数々の名言の背景と教訓を分かりやすく解説した本で、執筆の動機は孫に伝えるためだったそうです。現代中国人の行動心理を理解する上でも、非常に役に立つ本になっています。

「極める！ペン字・筆文字練習帳」発売

産経国際書会・鈴木暁昇審査会員のペン字、筆文字が圧倒的にうまくなる「極める！ペン字・筆文字練習帳」がコスミック出版から発売(1300円+税)。見やすく、書き込みやすいA4版でボールペン字、筆文字を段階的に学習できる構成です。見開きワンテーマで右に練習帳、左に美文字を書くための詳細な解説を掲載、使いやすさを追求した一冊。これを使えばまたたくまに美文字の使い手に。



各会書展お知らせ(産経新聞社後援)

(平成29年1月～6月) ①会期 ②会場 ③代表名

1月

第35回記念埼玉県中央書道展

- ①1月27日(金)～2月1日(水)
- ②上尾市民ギャラリー
- ③赤熊 玉蓉

2月

第80回龍峽書道展

- ①2月2日(木)～2月7日(火)
- ②東京都美術館
- ③林 龍成

第35回全国公募・学生部併催 煌心展

- ①2月15日(水)～2月21日(火)
- ②東京都美術館
- ③松崎 龍翠

第56回同巧会書展

- ①2月21日(火)～2月26日(日)
- ②銀座かねまつホール
- ③青陽 如雲

第28回書成会書展

- ①2月21日(火)～2月26日(日)
- ②セントラルミュージアム銀座
- ③田村 政晴

6月

2017年誠心社現代書展

- ①6月15日(木)～6月21日(水)
- ②東京都美術館
- ③渡邊 麗

催 事 一 覧

催事名	会 場	作品締切	会 期	贈賞式会場	贈賞式日程
第33回産経国際書展 新春展 (代表展併催)	国立新美術館		1月25日(水)～2月6日(月) 10:00～18:00 (最終日は15:00迄) ※1月31日(火)は休館	乃木会館	1月26日(木) 16:00～18:30
産経国際書会 総会	大手町 サンケイプラザ		4月18日(火) 14:00～16:00		
第34回産経国際書展 審査会	シアター1010 ギャラリー	5月8日(月)	5月23日(火)～5月26日(金)		
2017産経ジュニア書道コンクール審査会	東京都美術館	6月2日(金)	6月27日(火)、28日(水)		
第34回産経国際書展 本展	東京都美術館		7月27日(木)～8月3日(木) 9:30～17:30 (最終日は14:30迄) ※7月31日(月)一部掛替えあり	明治記念館	8月1日(火) 16:00～19:00
2017産経ジュニア書道コンクール	東京都美術館		7月27日(木)～8月3日(木) 9:30～17:30 (最終日は14:30迄) ※7月31日(月)一部掛替えあり	東京都美術館 講堂 (予定)	7月29日(土) (予定)
第34回産経国際書展 東北展	せんだい メディアテーク		9月15日(金)～20日(水)	ホテル メトロポリタン 仙台	9月18日 (月・祝) 15:00～
第34回産経国際書展 瀬戸内展	広島県立美術館 (予定)		<未定>	<未定>	<未定>
第34回産経国際書展 中部展	愛知県美術館		11月14日(火)～11月19日(日)	キャッスル プラザ	11月18日(土) 12:00～
第34回産経国際書展 関西展	大阪市立美術館		11月28日(火)～12月3日(日)	天王寺都 ホテル	12月3日(日) 12:30～
第34回産経国際書展 新春展 (代表展併催)	国立新美術館	平成29年 11月17日(金)	平成30年1月24日(水) ～2月5日(月) 10:00～18:00 (最終日は15:00迄) ※1月30日(火)は休館	<未定>	<未定>

※平成28年12月現在

追悼

次の先生方が黄泉につかれました。
本会での活躍とご指導ご鞭撻を賜りましたことに厚く御礼申し上げますとともに、
心よりご冥福をお祈り申し上げます。合掌。(敬称略)

審査会員 亀井 周芳(平成28年10月) 無鑑査 橋高 和甫(平成28年11月)

編集後記

新しい年の幕明けです。皆様明けましておめでとうございます。本年もどうぞ宜しく
お願い申し上げます。

2020年の東京オリンピックに向けて様々な展開が繰り広げられた昨年でしたが、3年
後の東京はどう変わりゆくのでしょうか。

書会も3年後には更に加速する高齢化にどのように対応してゆくのが今後の課題と
なりそうです。発足当時の「国際展として世界に書の普及を図る書展を…」という理念に
基づき、今海外の情勢が問われる中での対応策として、来年に向けて具体案が上がって
きているようです。隣接する国々との交流も、書を通して世界平和に結びついてゆけた
らと願っています。

今年も「新春展」から新たなスタートとなります。皆様と共に健康で佳い年となります
よう念じております。

(小川 艸岑)

(会報編集委員／高頭子翠、小川艸岑、影山瑤琴、早坂喜伊、渡邊麻衣子)

表紙：題字揮毫は風岡五城理事長

編集・発行 平成29年1月号

〒100-8079 東京都千代田区大手町1-7-2

産経新聞社事業本部内

産経国際書会事務局

TEL:03(3275)8902 FAX:03(3275)8974

<http://sankei-shokai.jp/>

<https://www.facebook.com/sankeishokai>

お願い

会員の皆様に住所・電話番号等
の変更があった場合には事務局
までご連絡くださいますよう、また、
各会書展のお知らせは早めにお
願い致します。